

タイトル:

## 『第三回感動創造フォーラム』開催レポート

平成 26 年 2 月 28 日（金）に、私ども感動創造研究所主催の『第三回感動創造フォーラム』を開催致しました。今回はそのエッセンスをお伝えします。



感動創造研究所では感動体験に富んだ心豊かな社会をデザインするため、社会のあるべき姿を問い直し、人の根源的感性と社会原理を紐解くひとつの試みとして、前回にひきつづき「感動」について語らうフォーラムを開催いたしました。

第三回目となる今回の感動創造フォーラムは、前回「時空を超えて～観て・聴いて・感じる 感動のフォーラム」の第2弾として、古今東西の詩人や文学者たちの恋愛をテーマとした作品について、「語り、朗読し、演奏する」というこれまでにないユニークな表現を通して、恋愛の諸相を感じながら「恋愛の森羅万象」に想いを馳せ、「感動」の根源となる「こころ」の在り方について語り合うという新しいスタイルのフォーラムです。

### 第1部 ライブステージ 「時空を超えて恋愛を旅する」

暗闇の中、2つのスポットライトが照らすのは、アコーディオン奏者・新井武人さんと、ミュージシャン・saori さんのおふたり。2人の競演でステージの幕が開けます。

『いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬがすぐれてときめき給ふ有けり』

高月晶子さんが朗読するのは、誰もが知る「源氏物語」の冒頭、「第一帖・桐壺」。この朗読を皮切りに、本日のプレゼンター、九州大学特任教授の目黒実さんが源氏物語について語ります。



目黒 実 教授

「源氏物語とは、源氏が数多くの女性と恋に落ちる物語だと思われている。そうした側面はもちろんあるが、それがすべてではない」と目黒さん。「源氏物語とは源氏が美しい母親像を追い求めるなかで、父親を越えようとするのがテーマなのだ」と。

これはまさに源氏における「イニシエーション (=通過儀礼)」であり、アメリカのジョーゼフ・キャンベルが「神話論」で提唱した「セパレーション」、「イニシエーション」、「リターン」の英雄譚の原初的な構造とも重なってくると目黒さんは分析します。さらには、ストーリー、プロット、シーン、キャラクター、そしてエピソードという文章の5つの基本的構成要素について、源氏物語は実に考え抜かれた物語の構造を持っているとのこと。



高月 晶子 さん

ここで話題は大きく転換し、話題はスタンダード「恋愛論」に。高月さんの朗読を受け、目黒さんは「スタンダードが定義した恋愛の4つの種別と源氏物語はぴったりと重なってくる」とおっしゃいます。源氏の藤壺への想いが、「情熱的恋愛」、10歳の若紫に藤壺の面影を見た「趣味恋愛」、非常に美しい朧月夜に抱いた恋慕の情が「肉体的恋愛」、そして政治的理由により源氏の最初の妻となった葵の上とは「虚栄恋愛」によるものだ。と。

さらに、このスタンダードの「4つの愛の形」について、2つ抜けていると目黒さんは語ります。それは”初恋的恋愛”と”惜別の恋愛”の2つの恋愛。この2つがあってこそ4つの恋愛が生きてくるのだ、と目黒さん。

こういった話題のなかで、次々と紹介される恋愛小説の一節。なかでも、目黒さんが「あたかも音楽が流れるかのように描かれる」と評する村上春樹の小説のなかから紹介された、「東京奇譚集」で語られる台詞。「男が一生に出会う中で、本当に意味を持つ女は三人しかいない。それより多くもないし、少なくもない」。この言葉は目黒さんの好きな言葉のひとつだとか。

話題はまだまだ尽きず、「伊勢物語」の一節の朗読が始まる、日本の文学・芸能史に移ります。そのなかで語られることは、「源氏物語」以降、源氏物語が近現代の恋愛小説はもちろんのこと、能・狂言、人形浄瑠璃や歌舞伎において、強い影響を与え、数々のモチーフとされてきたかということ。いま現在、多くの文学者によって翻訳され、映画にも漫画になって親しまれているこの「源氏物語」こそが、日本の恋愛小説の原点なのかもしれません。

井伏鱒二「初恋を偲ぶ夜」、永瀬清子「明け方にくるひとよ」、アメリカの作家・ピート・ハミルの「愛しい女」、そして谷川俊太郎の詩の一節、「失恋とは恋を失ったことではない」のロマンティズム溢れる朗読を経て、いよいよ第一部は大団円を迎えます。

saoriさんの弾き語り、小田和正「言葉にならない」そして新井さんの一青窈「空蟬」の弾き語り、第一部は幕を閉じます。



saori さん



新井 武人 さん

## 第2部 トークライブ「男ココロ・女ココロ」



PHOTO：右から 目黒 実 教授、高月 晶子さん、守法 美宣 所長

第二部は第一部でナレーターをお務め頂いた高月 晶子さんを挟み、プレゼンターをお務め頂いた目黒 実さんと、感動創造研究所所長の守法 美宣の3人によるトークライブです。

第二部のテーマは「男ココロ・女ココロ」。読んで字の如く、恋愛におけるオトコとオンナの心の差異が第二部のテーマです。初恋に「囚われ続ける」男と、「忘れてしまう」女の違いはどこにあるのか？一青窈の言葉「男の恋愛は別名保存、女の恋愛は上書き保存」にあるように、意識構造における違いが男女にはあるようで、それは精神科医・齋藤環の「関係する女 所有する男」とも密接に繋がっているようです。

そして話題はそれぞれの「初恋」の話へ。「忘れてしまった」という高月さんでしたが、目黒さんのお話は、初恋が如何にご自身の心を捉えているかというお話で、その軽妙な語り口に、終始会場から笑いが漏れていました。そんな目黒さんが世の男性に訴えたいこと。それは、「子どもの頃から児童文学を読み、赤毛のアンを読み、若草物語を読み、小公女を読み。二十歳から女の研究をしても遅い。児童文学で女を知れ」と。

最後は、守法所長のセレクトによる、映画「男はつらいよ」の名台詞の朗読で幕を閉じます。

「いいかい、恋なんてそんな生易しいもんじゃないぞ。飯を食う時も、ウンコをする時も、もうその人のことで頭がいっぱいよ、なんだかこう、胸の中が柔らかくなるような気持ちでさ、ちょっとした音でも、例えば千里先で針がポトンと落ちて、わーっとなるような、そんな優しい気持ちになって、いい、この人のためならなんでもしてやろうと。命なんか惜しくない、ねえ、寅ちゃん、私のために死んでくれる、と言われたら、ありがとうと言ってすぐ死ぬ、それが恋というもんじゃないだろうか。」

目黒先生の言葉をお借りすると、まさに「恋愛以上に感動するものは、そうそうない」という一言に集約される、第二部トークライブでした。

-----

最後に、今回『第三回感動創造フォーラム』に、定員を上回る皆様にご参加いただき、誠に有難うございました。また、今回ご参加いただけなかった皆様には、お詫びを申し上げるとともに、是非次回のご参加をお待ちしております。今回のフォーラムには **130 名**を超える方々にご参加頂きました。ありがとうございました。また会場を提供下さるなど様々な側面で開催を支援して下さい下さったコイズミ照明株式会社様にはこの場を借り厚く御礼申し上げます。

また、会場にてご寄付として頂きました、総額 **23,835 円**を、経済同友会『IPPO IPPO NIPPON プロジェクト』<http://www.doyukai.or.jp/ippo/> を通じて、東日本大震災で被災された方々へ全額寄付させていただきます。

些細ではありますが、被災地の方々、また日本にたくさんの「感動」が届くことを願っております。

(文責 感動創造研究所)